図書館だより

第 29 号
2001. 12. 1 発行

編集兼発行　三重短期大学附属図書館　〒514-0112 三重県津市一身田中野157　TEL 059－232－2341

目　次

「そっ、こまったもんだよなぁ」……佐々木光明 (1)

日独の国立図書館……岩田俊二 (5)

新規受入図書案内（2001年4月～2001年9月受入分）…… (12)

「そっ、こまったもんだよなぁ」

佐々木光明

やはり「じけん」だと思います。これって、大人にまつわる未解決「社会事件」なのだ。

■　近くの児童館。子どもたちがひとしきり遊び騒いだあとに、何やらテーブルを囲んでまじめな顔するときがあります。「勉強してるってとこ見せないと安心できないんだよな、うちの親」、「自分で思ったことはきちんと言いなさいって言うから何かいうと、『でもね』って口ごたえするんだ」。なんだか、保護者懇談会みたいな雰囲気。そして最後に一同、「こまったもんだよな、大人って」。子どもがマジになるとき、いつも大人絡みです。子どもは親の精神安定剤ではありません。子どもも気苦労がたえないよなぁ。

□　今どきの子どもはすぐキレて協調性がない、とかいう大人に限って「ガキ大将がいなくなりましたねぇ」とか、ワケわかんないこと言ったりします。貧しくて少しいじめっ子でも、最後はみんなの面倒を見る優しいガキ大将とかいうステレオタイプ化されたイメージを持っているのでしょう。しかし、現実にはそんな子いません。いないことわかってるのは子どものほうで（だからドラえもんなど安心して見ていられるのかもしれません）、錯覚しているのは大人のほうだったりします。優しかったらガキ大将にはなってません。コーディネーターみたいなことやってます。昔から他の子を脅かして自分のペースで遊ぶ子はいました。そんな中に巻き込まれた子どもの悲惨さなど、わからないかもしれません。わからんちんの大人は。

□　ずっと子どもが問題だといわれてきたけれど、りっぱに大人が問題です。

■　甥っ子の小5の道徳の研究授業に出かけたことがあります。国民を苦しめるわがまま王子が、狩りのルール破りを森の守番にとがめられ、逆に牢屋に閉じこめてしまいます。しかし、王になってわがままが過ぎて同じ牢に入れられ、好き勝手と自由とは違うことを悟るという話です。「指導書」でしっかり授業のスジを組んできた先生は、自由に想像しながら感じたこと言ってみましょう、と余裕の顔で水を向けます。指導書には、王子が本当の自由の大事さを悟ることや、後悔の気持ちを子どもに聞いてみるとあったのでしょう。しかし子どもたちは、王子をやめ

ればそんなに苦しまなかったんじゃないか、守番も一回ぐらい見逃せば良かったじゃんとか言い始め、混乱。研究授業は大盛り上がり。自由は我慢することとでも言いたげな先生の先導に、子どもの「自由な感性」は、先生や「先生を指導する先生」といった大人を盛下げてしまった。

困ってしまったその先生、やおら、結婚して以来自分のおくさんに結構気を使ってる話をし始めちゃいました。おくさんに喜んでもらうのにごますったりしてることやら、日頃の苦心を。自由であって自由でないことを伝えたかったようですが、子どもたちは、しばし先生がおくさんを大切にしていることに大いに盛り上がりました。

子どもにとって重要なのは、過去でも過程でもなく、現実の状態なのです。

□　ガキは本来気ままなやつらだから、教師が指導書なるものに従ってこういう成果を上げたいと思っていようが、いまいが、水を向けたら自由な発想で感想を言い合い盛り上がったり、自由な感想で盛り下がったりします。でも、たいがいがたしなめられる運命です。先生の指導書にはそんな範囲まで書き込まれていないから。

□　ある本で、絵本作家の五味太郎が子どもの頃、婦人雑誌の「綴じ込み付録」というヤツにワクワクドキドキしたことがあると言っていました。なにやら「結婚生活の心得」とかいって旦那を早めに風呂に入れさせ、一緒にどうだと誘われたら、一度目ははにかみ、二度目に控えめに従うとか何とか書いてあって、わぁ～どうしようなんて言ってて、でもなんかいいな、と混乱したらしい。同じこと感じたことがあって、嬉しくなってしまった。

□　ま、結婚生活の心得はともかく、「指導」、「心得」のたぐいは世の中にけっこう溢れていて、特に入学準備の案内や雑誌の入学準備号にたくさん出てきます。刑務所にも「入所の心得」がありますが、指導の対象というわけですね。ちなみに、号令に従うときは、はにかみながら…とは書いてません。

□　指導、教訓をたれたがる大人、りっぱに大人は問題です。

■　将来何になりたい？これを子どもが聞かれるのは、七夕の時とか卒業式の時、あんまり子どもはそんなこと考えながら遊んでいません。将来の夢を語りそびれた人が聞きたがることで、子どもはそんなに暇じゃないようです。しかし大人があまり聞くものですから、とりあえずサッカー選手になりたいだとかお巡りさんになりたいとか、一応いっときます。いつもお金がないないいってる某お父さんに、子どもがお父さんの夢はお金持ちになることだねっていったら、お父さんはちょっと複雑そうでした。お父さん、夢が現実とあまりに違うから。

でも中学生ぐらいになると、ちょっと意識し始めるようです。しかし、もともとあまり考えたことがないものだから、「夢がない」自分に慌てちゃう子がけっこういるのです。それでも困らないのですが、親や先生からお前には夢がないのかとか言われてしまうと、カッコつかないものだから、ついまた苦しまされてしまうのです。この世代結構「優しい」だけにくたびれてます。(「みんなの期待に応えたいと思ってる中学生」の調査結果01/ 9/22朝日)

□　学校ぐらい出てたほうがいいぞとか、将来苦労しないように今勉強しておいたほうがいいぞとか、どうも「君のため」お節介が多いようです。だいたい、こんなこと言うときは、自分のことを思い返しながら、もっと勉強しとけば良かった程度に反省がこもってるときがほとんど。でも、子どもは、勉強しとけば将来役に立つだとか、ここやっとけば次の単元で楽になるなんて思って勉強していません。ましてや、今勉強しておけば、出世が可能だなんて思ってる子どもはいません。

将来のためにとさまざま前倒しして、子どもに忍耐と学習を要求してくる大人、困ったもんです。

□　子どもが本を読まずに困ってます。読書で読解力を付けるためにもなんとか読ませたいけれどどうしたらいいでしょう、といって相談するお母さんがけっこういる。そういう人、子どもの頃に本なんか読んだことないんじゃないかなぁ。自分のことふりかえって考えてみましょう。

□　子どもの気づかいに鈍感な大人、りっぱに大人も問題です。

■　授業参観へ行って見つけた「廊下では走らず、静かに」。いまだに学校の廊下は走っちゃ行けないようです。ぶつかったらアブナイからだそうです。校外で、車のほうがぶつかってくるほうが結構多いんですがね。街には、血相変えて走ってる銀行員のおじさんやお姉さんがいますが、ぶつかっているのはあまり見かけないですね。でも、学校は今でも走ってはいけないようです。何事も起こらないように、というのが管理の原則のようです。何か起こらないかなぁ〜、何か起こるといいのに、が子どもの原理。原理原則がぶつかり合ってるのですから、難しい。

先生が見てないところで子どもは大声出します。廊下で転げたりもします。用もないのに走ります。それを見つけた先生は、こらあぁとばかりに叱ります。

□　叱っている先生は、いきいきしたりしています。静かにしなさい、黙りなさい、きちんとしなさい、仲良くしなさい。先生用語は彼らの生き方のよう。何事も自分のまわりで起きないように。ただ、子どもは先生の姿に、生き方の選択肢を重ねます。子どもに、はじめからそうした生き方の方向性を示さずともいいように思うのですが。

□　教師、教える人が、評価し、指導し、訓育する人にいつから変わったのでしょう。

□　管理・指導がすきな学校、りっぱに大人の問題です。

■　「先生はね、君のことが心配なんだよ」。よく使われるけれど、かなりスペシャルな言い回しで、ぼくは、わたしはではなく職業が主語になってる言葉なのです。これって変じゃありませんか。「農夫はいま米作りに忙しいんだ」というのもしっくりきません。じつは、似た言い回しに「お父さんは」「お母さんは」というのがありました。「先生は君の将来を心配して言ってるんだ」というのは、どうもひとりの個人として心配しているのではないようです。クラスとか学校に君のような子がいると困るって言ってるだけです。

文部省はじめ大人は子どもの将来のためにといいながら懸命になるけれど、制度をいじっては変えたり、いつも振り回されるのは子どもです。情けない話です。時々大人のほうがキレて、いうことときかないヤツは刑務所にぶち込むぞ、と脅したりもするからやっかいです（少年法の厳罰化はしてしまいました…）。

□　学校というところは、愚か者が賢くなっていくところ、わかってないものが段々わかっていくところ、落ち着きのないものが協調性を持ち始めるところといった「段階的上昇方式」が基本形です。学校ばかりでなく、会社やお役所も前年比較をしながら尻をたたき合います。中学生は小学生の模範にならなければならないし、高校生より大学生は賢くなければならない。こうしたプレッシャーから日本社会は解放されたことがありません。

昨日より明日が明るい日でなければいけないのでしょうか。何かの基準に引き上げながら生き方を教えられる、はたで見ていても疲れます。これでは、赤ん坊がもっとも愚かで、じぃさん

ばぁさんがいちばん賢いことになってしまう。
□「社会の学校化」。人間もそう愚かではありませんし、学校という「装置」が人間という生物に向いてるのか、21世紀はそれを問い直し始めているように思います。

閑話休題。
■　大好きな作家の斎藤次郎さんと懇談する機会がありました。百石（ももいし）小学校という青森県の田舎町の学校に半年間４年生として留学した経験を持っている人物です。留学先は、わたしの郷里に近いこともあって通学路などの風景を想像することができます。斎藤さんが子どもたちからほめられて嬉しかった話をしてくれたのですが、道草しながら学校に一緒に行けたことだといいます。たとえば、学校を目前にしていながら、わざわざ戻ってもう一度氷の張った水たまりをさらに細かくバリンバリン踏み直すだとか、からかった犬のところへそっと戻って「わぁ！」って言って脅かし直したりして、遅刻寸前で登校したようです。学校という「目的地に最短で無事に行く」という、目的への合理性を無視しながら帳尻を子どもと一緒に合わせられたからでしょうか。禿げかかった頭の同級生をジロちゃんと呼び、一緒に通学路の周囲に心動かしながら、寒風を受けて学校へかよう小学４年生もすてきです（斎藤『母親の条件、父親の条件』雲母書房00年）。子どもも中学あたりから、湧いてくる透明感のあるエネルギーを忘れてしまいがちです。子どもを丸ごと受けとめる、大人の側が息苦しさにあえいでいては難しそう。
■　社会評論家の芹沢俊介さんと、三世代の虐待事件があったばかりもあって、家族のなかで祖父母と孫はどんな作用を家族にもたらすのか話をしたことがあります。家族関係の実態や空気を表すのに、家族のエロスという言葉を使ってきた芹沢さんは、家族のエロスとは子どもを受けとめる力だという。この子どもを受けとめる力が家族に充満しているとき、子どもはのびのびと子ども自身でいられるのです。家族のエロスの枯渇は、子どもを息苦しい状態に置き、暴力を生み出す。芹沢さんは近著の中で、教育＝しつけ、子ども期の被暴力体験、母であることにアイデンティティを持てないこと（自分へのこだわり）の三つが家族にエロスが充満することを妨げていると把握し、それらを暴力（虐待）の地平として抽出しました。子どもを受けとめる人間を男女関わりなく、「母」と呼び、母性の代替性は家族の構成員の役割からではなく、家族のあり方に関わっていることを指摘しています（芹沢『ついていく父親』新潮社00年）。
□　子どもが自分でいられること。それは、大人との関わりにかかっているがゆえに、翻弄されやすい。個人のレベルだけでなく、「学校」が形成してきた社会的価値をあらためて見直す機会だと気づき始めたのが21世紀という時代だと思います。

■　大人の感情的なガミガミ、ドロドロ、イライラ、ブツブツ、などなどの環境のなかで暮らしている子ども。しんどいこと、この上ないかと思います。これは、光化学スモッグや窒素酸化物といった生きてく空間の問題と同じく、子どもの環境問題なのです。

（ホント、こまったもんだよなぁ、大人は。かくいう小生も、原稿催促を反故にしまくったあげく、図書館の藤具さんに悲しいですと言われ、ぐさっときてしまった大人の一人。赤面しつつ、置筆）

日独の国立図書館

岩　田　俊　二

はじめに

図書館だよりに寄稿してほしいとの依頼があったが、寄稿するのは良いとして読書家でもないので本のことで紙面を埋めることはできないし、何を書いて良いか困惑した。仕方がないので、私が身近に感じている国立国会図書館とベルリン国立図書館の二つについて思いつくまま書くことにした。

国立国会図書館

私が国立国会図書館に通いだしたのは何時の頃からかは忘れたが、今までの私の拙い研究生活の過程では国立国会図書館に大いにお世話になった。研究のアイデアとなるような、研究を補強するような資料を探しに度々行ったが、大概そのような時は研究の目的が達成できるか、資料があるかどうか不安で心細い気持ちのまま地下鉄の駅を出て国会議事堂の裏側を通って国会図書館に通った。図書館の建物はあまり親しみの持てる雰囲気はなかったが、重厚で安定感を与えていた。東側の小さな入口から入館すると多くの利用者が館内を右往左往するのが見え、少し元気が出てくるようであった。検索の後で、資料の申請を行うが、資料が出てくるまでに時間がかかるので6階の食堂や別館地下の喫茶室で待機した。病院の会計処理の窓口のように自分の番号が電光掲示板に表示され、めでたく資料を入手したときは大変嬉しくなった。私の母校工学院大学の建築学科に吉田辰夫先生がいらした時には、建築施工を教えていただいた。吉田先生は昭和54年に定年退職され平成6年にお亡くなりになったが、昭和60年の夏に軽井沢の大学学寮で建築学科同窓会誌のインタビューを編集委員の一人として行った。その折りに先生と国会図書館との関わりについて裏話を交えてお話をお聞きした。吉田先生は松本藩士の家系に明治37年生まれ、今では文化財として有名な開智小学校から旧制松本中学、同松本高校を出て東京大学建築学科に学んだ。大学卒業後は当時建設省はなかったので、大蔵省営繕部に入られ官庁建築の営繕に従事された。その間、まだ専門学校であった工学院の夜間に教えに来られたこともあった。戦後は戦災復興院から建設省に移られ、霞ケ関官庁街の地区計画等をしていたが、ＧＨＱにより設立された旧赤坂離宮の国立国会図書館を本建築にするために建設省主体で設計競技をすることになり、建設省の作業責任者となった。国立国会図書館の設計競技、基本設計、実施設計、工事実施、昭和36年の第1期の竣工まで関与し、その後定年を待たず退職し工学院に

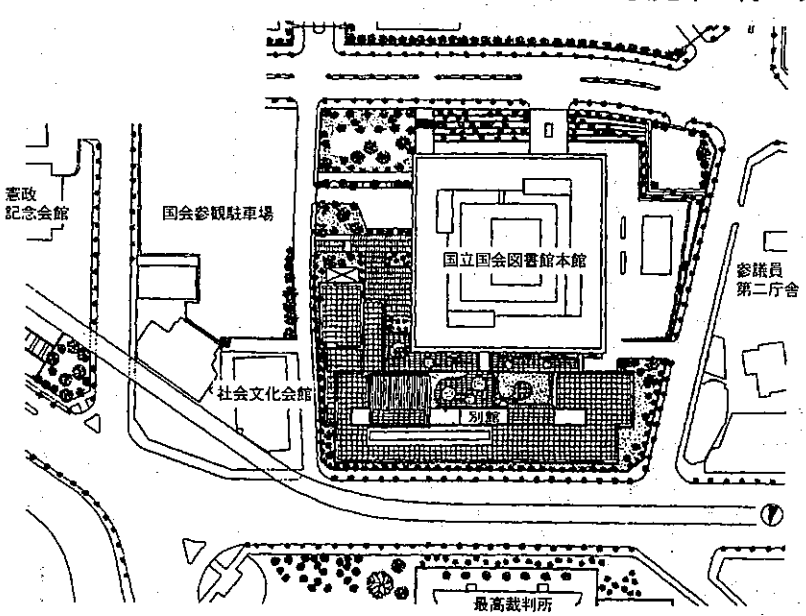
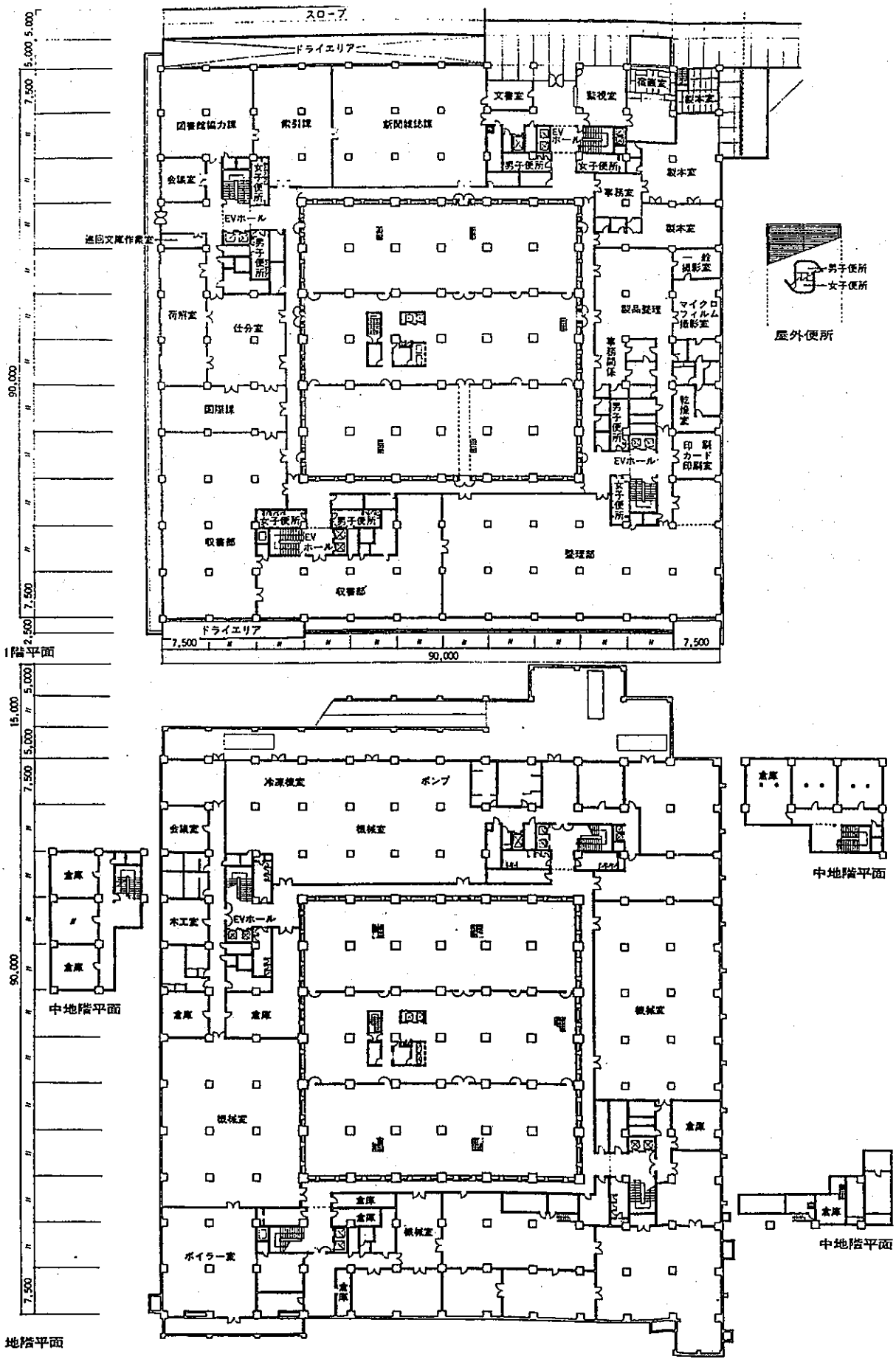
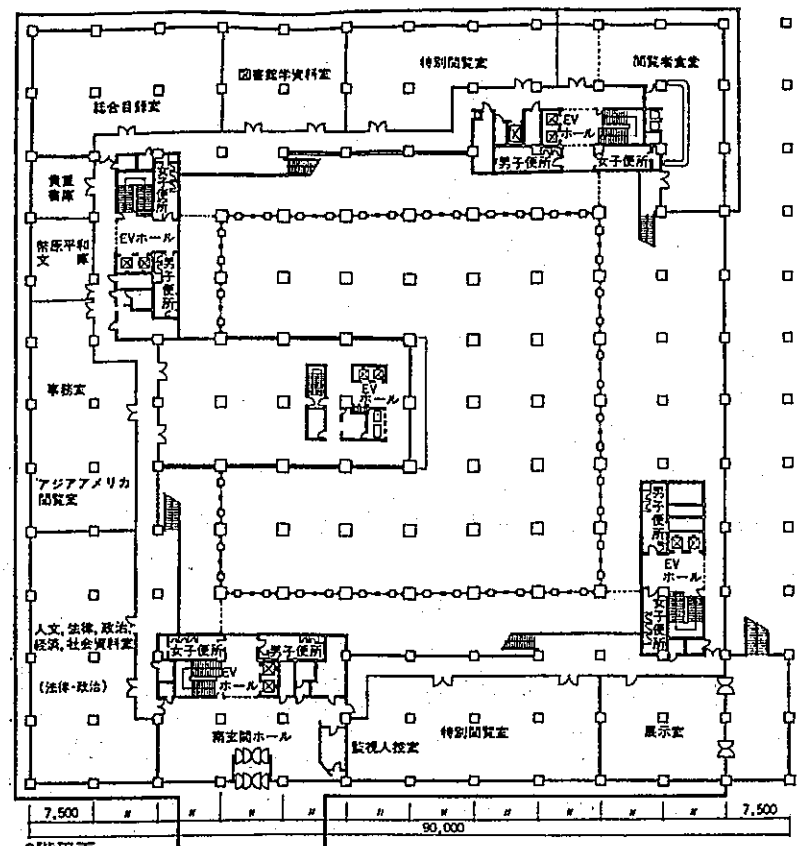


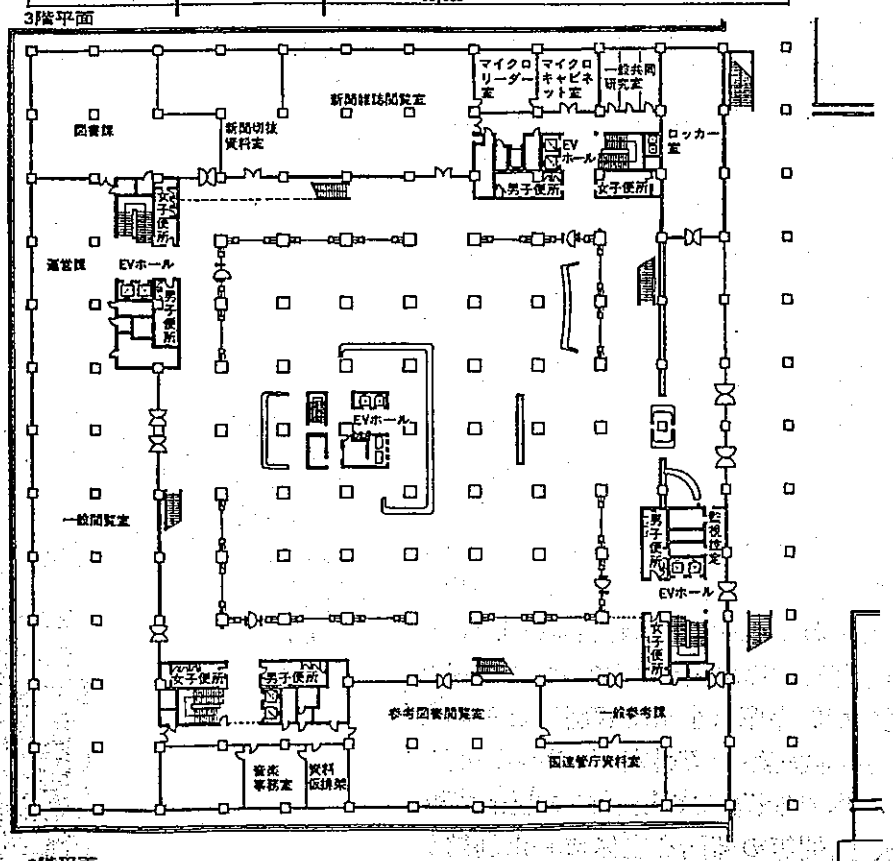
図1　国立国会図書館配置図

図２　国立国会図書館地階～３階平面図



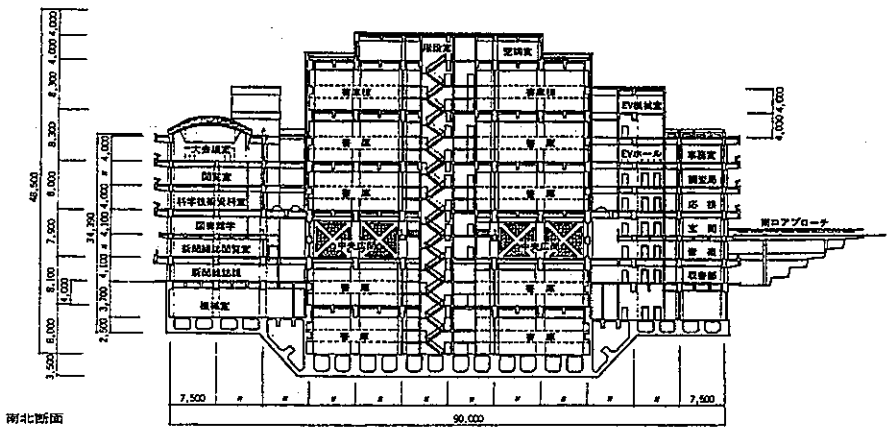

図書館年史資料室
特別閲覧室
閲覧室
総合目録室
EV
ホール
男子便所
女子便所
貴重書庫
EVホール
憲政平和文庫
事務室
アジアアメリカ閲覧室
人文,法律,政治,経済,社会資料室
(法律・政治)
南玄関ホール
監視人控室
展示室
7,500
90,000

3階平面


マイクロリーダー室
マイクロキャビネット室
一般共同研究室
新聞雑誌閲覧室
図書課
新聞切抜資料室
EV
ホール
ロッカー室
男子便所
女子便所
運営課
EVホール
一般閲覧室
監視控室
参考図書閲覧室
一般参考課
国連等庁資料室
資料仮排架

2階平面

図３　国立国会図書館南北断面図



いらした。１等当選の前川国男事務所で当時若手でその後図書館建築のエキスパートとなった鬼頭梓氏などとは自宅で夜が明けるまで設計について議論をしたそうである。国立国会図書館の貸し出しカウンターの垂れ壁に彫られた「真理は我等を自由にする」のレリーフをふだん何気なく見ていたが実はそのギリシャ文字は先生が書き、日本文字は当時の金森館長が書いたものであったことがわかった。吉田先生は明治以来の官庁営繕を支えた建築家の一人であった。

戦後の国家施設としては初めての設計競技であった国立国会図書館の設計競技は要綱、条件の提示の最初の段階から問題が生じ建築学会や建築家側から抵抗を受けた。問題点は①入選案の著作権は国のものとなり、国が設計をするので入選案の通りに設計される保証はないこと、②入選者は設計管理に参加できない、③基本設計、実施設計の予算措置がなされていない、④建築予算が不足するので、募集要綱の１万５千坪の中で第１期分として８千坪だけ設計するといったものであった。大御所建築家の前川国男が建築学会・建築家側と建設省との調停者となり、大蔵省に非常に安価な基本設計の委託費を認めさせ締め切り期限を３ヵ月延長して設計競技がスタートした。設計競技は123案の提出を見て、田中誠・大高正人案（前川国男建築事務所案）が１等になり、規模縮小予算削減のなかで現在のような当選案とは大分違う建物が実施された（図１～３）。設計競技の結果については、若手建築家などから１等案の設計思想の保守性、近代建築の本質からの逸脱、後退が指摘され、佳作１等の丹下健三案（図４）が近代建築を担うにふさわしいとの評価も出された。昭和43年第２期工事を終わった段階では延床面積69,750㎡、蔵書収納力220万冊、座席数1,500席であり、建物は中央部各３層の積層書庫（全部で17層）とそれを回廊状に取りまく閲覧室や資料室、それらの間の光庭の構成が基本である。その後本館の北側に73,000㎡の逐刊物、新聞等の部門を主体にした別館が昭和62年に増築され、本館の保守的な建築思想との対比が露わになっている。

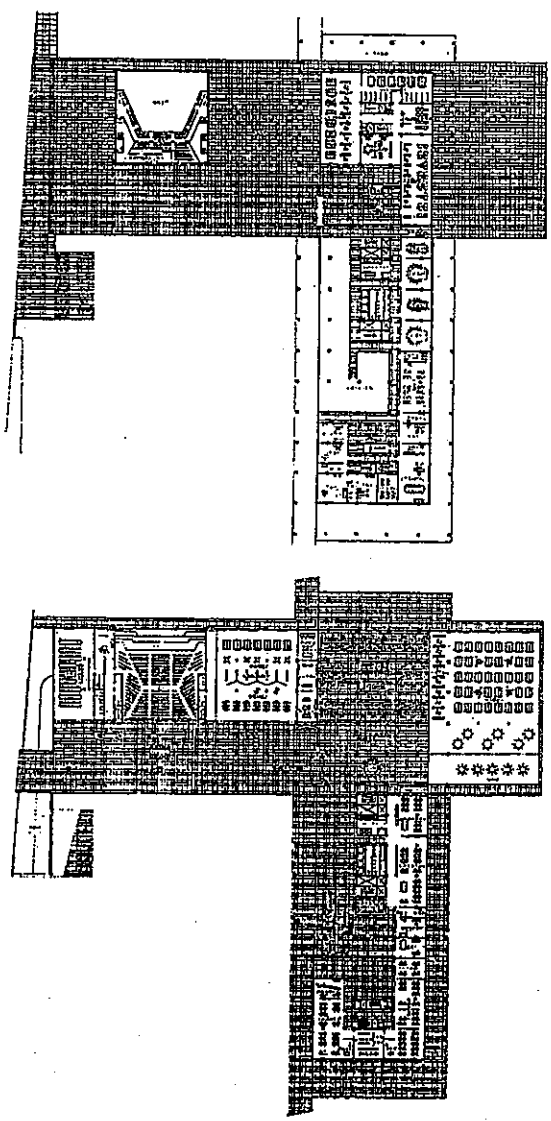


図４　丹下建三案平面図

ベルリン国立図書館

平成10年の夏に私は都立工業高校で教鞭をとりつつ社会人大学院博士課程に在籍する後輩の調査研究に同行してドイツ、チェコ、ポーランドを訪ねた。研究テーマはドイツ、チェコ、ポーランド国境地域の国家間共同作業としての地域計画オイロレギオンについてである。我々はまずベルリンに入り、チェコ、ポーランド国境方面までレンタカーで行くことにして、つかの間、ベルリン市内の特に首都移転により整備の著しい旧東ベルリンのポツダム広場を視察することにした。ベルリンの中心街クーダムからバスに乗り、周辺地域を含め全体的に工事中の広場から大分手前にあるバス停のポツダム広場で下車し広場を目指して歩いていくと、すぐ左手に鉄、ガラス、カーテンウォールを魔術のように駆使した近代建築の巨匠ミース・ファン・デル・ローエの設計のベルリン近代美術館が現在の感覚でも十分に洗練された姿を見せてきた。ご存じのようにミースはユダヤ人でドイツのバウハウス（美術工芸学校）で建築を教えていたが、ナチスの迫害からアメリカに亡命し、アメリカの大資本の事務所ビル等を設計する中でその才能を開花させた。美術館からさらに歩を進めると正面に有名なベルリンフィルハーモニーのコンサートホールが見えてきた。同時に、右手にコンサートホールと同じような屋根仕上げを持ったベルリン国立図書館がそびえ立っていた（図５）。二つの建物の設計者は近代建築の巨匠の一人とされているハンス・シャロンである。ハンス・シャロンはオーストリアで生まれた画家・建築家であるが、ベルリン国立図書館が建築途中の1972年に他界した。1978年に完成したベルリン国立図書館はドイツに幾つかある国立中央館の一つで延床面積81,300㎡、蔵書収容力400万冊、座席数1,700席である。我々はベルリン国立図書館への入館が写真撮影は不可であるが、誰でも可能であることを確認し内部の様子を見に行った。正面入り口へのアプローチは翼状の建物に包み込まれるような自然なものであった。入り口では荷物をロッカーに入れただけで何の手続きもなく内部に入れた。１階ロビーの階段を上がっていくとホワイエに達し、折り返し更に階段を上ると広大な閲覧室であった。（図６）。閲覧室は床の高低差が各所で微妙に異なり連続した一体空間となって、空間がうねっていた。図７の断面図のように床が主体構造とそうではない柱によって微妙に高低差がつけられており、その結果一体空間の閲覧室は各所でアルコーブのような小さな溜まり空間をつくりプライバシーを確保していた。我が国と比較して図書館が非常にオープンで利用者に優しく、親密な空間を作っていることに感心した。

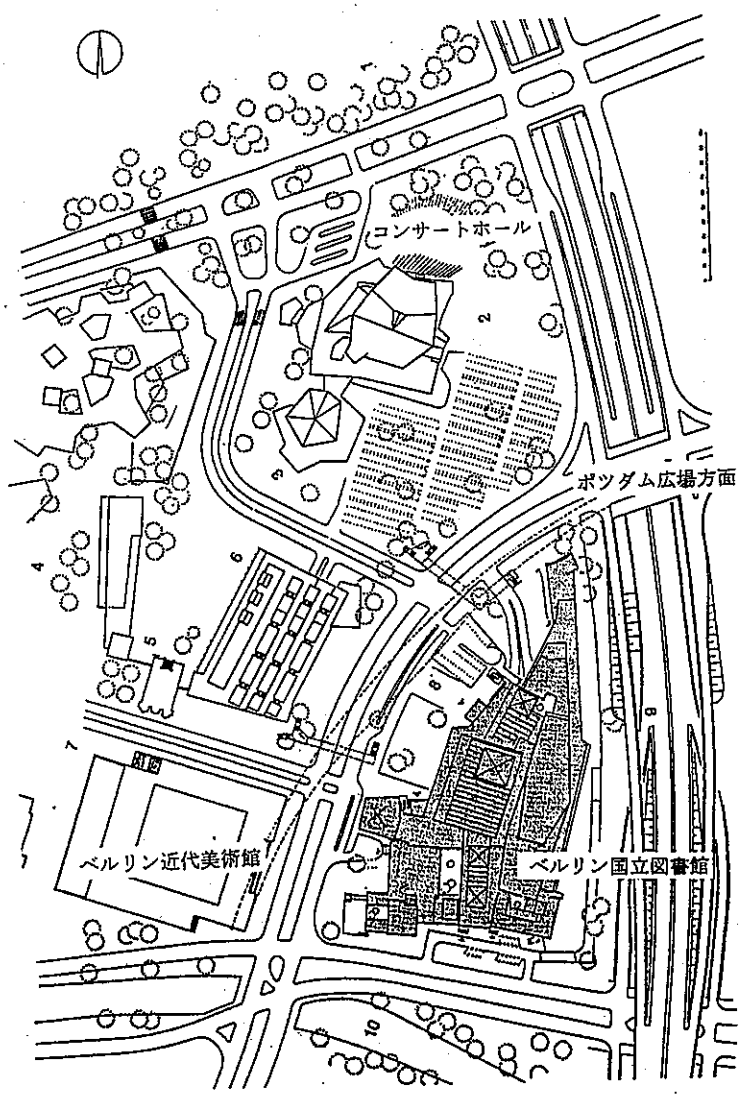
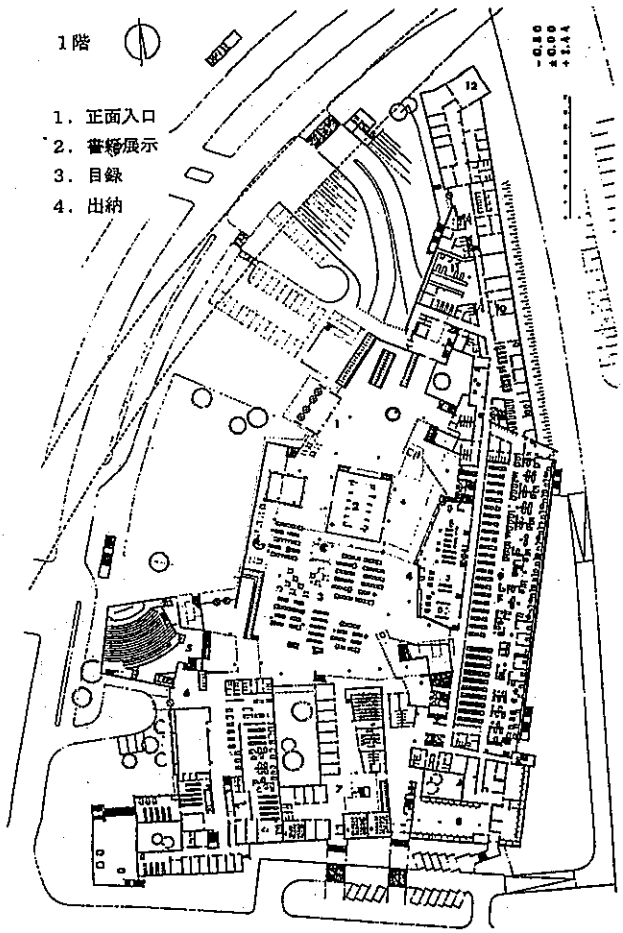
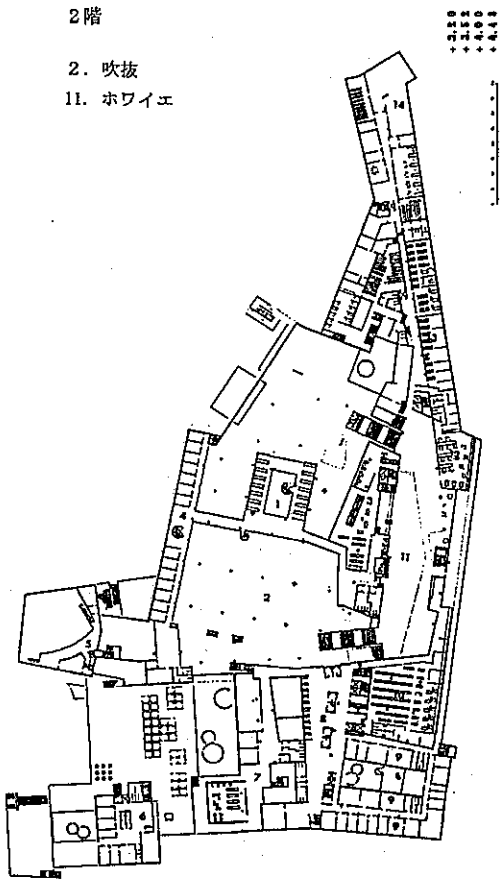
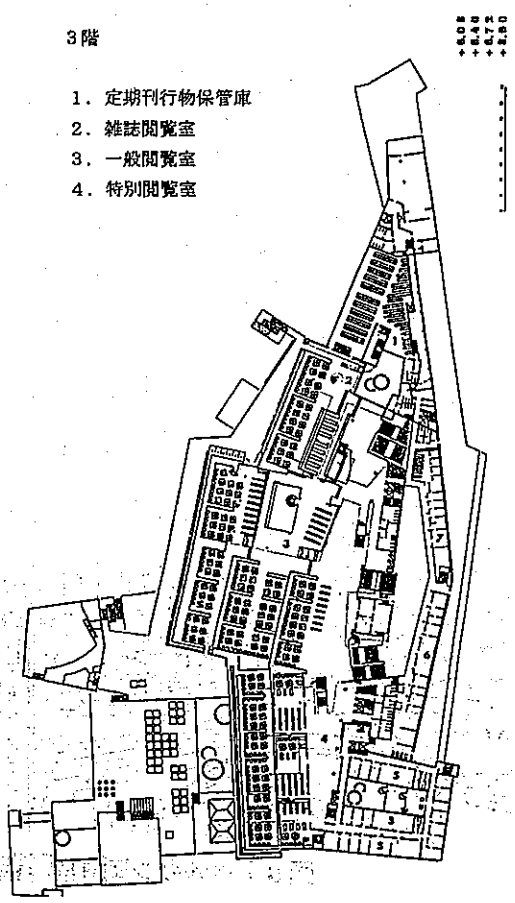


図５　ベルリン国立図書館配置図

図6　ベルリン国立図書館1階～4階平面図







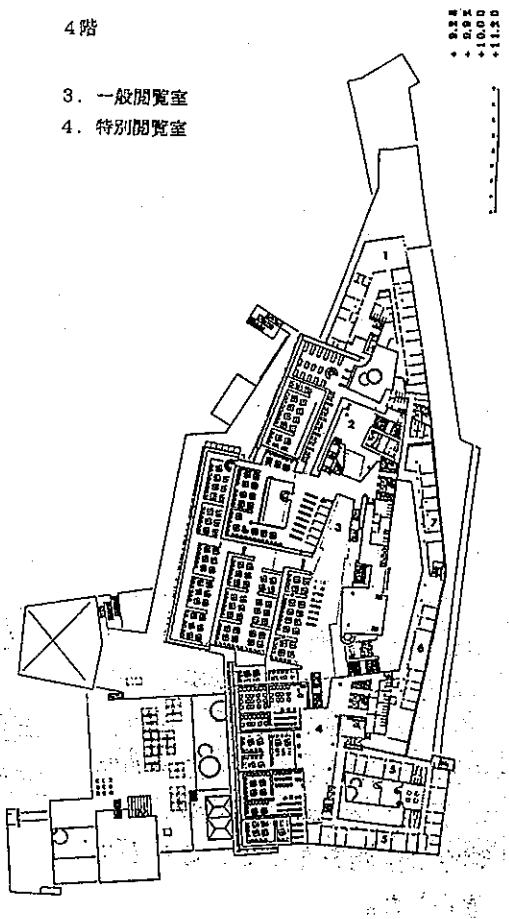
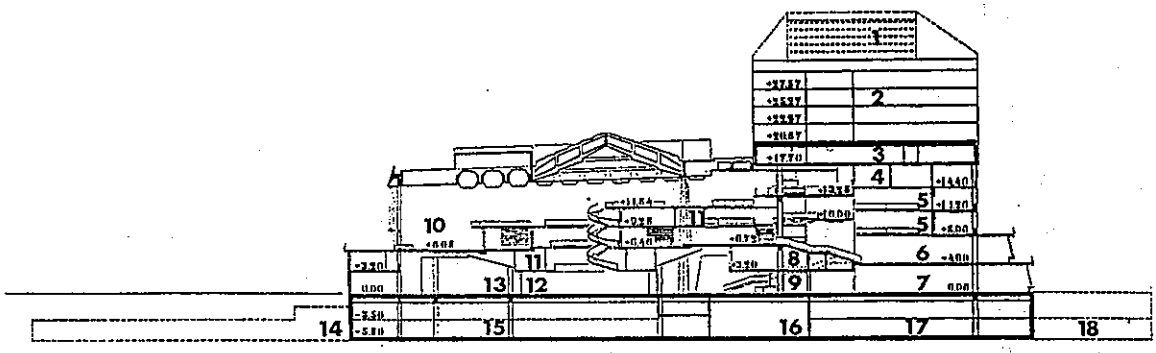


図7　ベルリン国立図書館東西断面図



おわりに

我が国の国立国会図書館は国会議事堂に連なる国家施設の一つとして建築され、一般利用者の立場に立った設計思想が弱かった。ベルリン国立図書館は肩肘張らない、利用者優先の思想で設計されている。このことは本稿に掲載した両者の図面から明白に理解できると思われる。三重短期大学でも図書館の建設構想があるようだが、たとえ小さくても利用者を中心に地域に開かれた図書館の実現を目指してほしいと思う。

新規受入図書案内
（2001. 4～2001. 9）

総　記（000）

〈岩波新書〉

ゲランドの塩物語　－未来の生態系のために－　コリン・コバヤシ
植物のこころ　塚谷　裕一
日本政治　再生の条件　山口　二郎
定常型社会　新しい「豊かさ」の構想　広井　良典
福祉ＮＰＯ　－地域を支える市民起業－　渋川　智明
学問と「世間」　阿部　謹也
柳田国男の民俗学　谷川　健一
言語の興亡　Dixon, Robert M.W.
インカを歩く　高野　潤
宇宙からの贈りもの　毛利　衛
異文化理解　青木　保
現代イラン　神の国の変貌　桜井　啓子
ペンギンの世界　上田　一生

〈岩波ブックレット〉

株式相互持合いをどうするか　奥村　宏
メディアが変えるアジア　アジアプレス・インターナショナル
ローマ法王　－世界を駆けるヨハネ・パウロ２世－　宮平　宏・藤谷　健
和解と共存への道　金　大中
よみがえれ、宝の海　諫早干潟・川辺川ダムから海を考える会
学力低下と新指導要領　西村　和雄
ＮＨＫためしてガッテン１．２．３．４　ＮＨＫ科学番組部
こんなに面白い東京国立博物館　新潮社

哲　学（100）

10年後の自分が見えるヤツ　１年後の自分も見えないヤツ　落合　信彦
良心と至誠の精神史　大橋　健二
夢占い事典　ルナ・マリア
僕が遍路になった理由（わけ）　早坂　隆
ある日突然、お遍路さん　高田　京子
愛される女性のインテリア　小林　祥晃
愛のシッタカブッタ　小泉　吉宏

歴　史（200）

沖縄・離島情報　林檎プロモーション
るるぶドライブ北海道　有沢　徹朗
大阪おもしろ遊び場ガイド　前川　久夫
るるぶ大阪　内山　弘美
誰も知らなかった英国流ウォーキングの秘密　市村　操一
伊能ウォーク全記録　日本ウォーキング協会
日本現代史　体制変革のダイナミズム　歴史科学協議会
開国・維新　松本　健一
明治国家の建設　阪本　多加雄
明治国家の完成　御厨　貴
政党から軍部へ　北岡　伸一

社会科学（300）

労働関係訴訟法１．２　山川　隆一
手話ハンドブック　野沢　久美子
絵でみてカンタン手話きほん単語集　竹内書店新社編集部
くたばれ！専業主婦　石原　里紗
ゼミナール経済学入門　福岡　正夫
保健体育科・スポーツ教育重要用語　３００の基礎知識　松岡　重信
図解高齢者・障害者を考えた建築設計　楢崎　雄之
現代資本主義　北原　勇
自立生活運動と障害文化　全国自立生活センター協議会
生の技法　安積　純子
地域経済と中小企業　関　満博
産業集積の本質　伊丹　敬之
いま、憲法学を問う　浦部　法穂
三省堂憲法辞典　大須賀　明
立憲主義・民主主義・平和主義　浦田　賢治
憲法　野中　俊彦
解説世界憲法集　樋口　陽一
一から始めるビジネスプランづくり　茂呂　戸志夫

最高裁判所判例解説　法曹会
新・教育法規ハンドブック　菱村　幸彦
教育管理職小論文精選
　１２０問題の演習と解説　教育課題研究会
市民活動の展開と行政
山梨学院大学行政研究センター
新しい時代の消費者法　国民生活センター
実践総合的な学習の運営　加藤　幸次
ポートフォリオで総合的な学習を創る　安藤　輝次
教育の方法と技術　柴田　義松
教育課程　天野　正輝
金融　大橋　英五
授業を変える学校が変わる　佐藤　学
中国食文化事典　木村　春子
障害学への招待　石川　准
スローフードな人生　島村　菜津
市場経済化する中国　加々美　光行
中国経済の成長と構造　厳　善平
民事執行法　山崎　恒
総合的学習のカリキュラム開発と評価　天野　正輝
家庭・技術科重要用語３００の基礎知識
福田　公子
教育実習の新たな展開　有吉　英樹
生涯学習社会　讃岐　孝治
「総合的な学習」と人間形成　佐野　安仁
重点講義民事訴訟法　高橋　宏志
中学校新教育課程の解説　特別活動　森嶋　昭伸
中学校新教育課程の解説　総則　河村　潤子
中学校新教育課程の解説　道徳　押谷　慶昭
中学校新教育課程の解説　技術・家庭　渡辺　康夫
中学校新教育課程の解説　社会　佐伯　真人
国際経済学入門　浦田　秀次郎
あなたにもわかる国際経済論　仙頭　佳樹
人間の法的権利　Sieghart, Paul
入門国際人権法　久保田　洋
国際人権法概論　初川　満
テキストブック国際人権法　阿部　浩己
テキスト国際刑事人権法総論　五十嵐　二葉
拷問等禁止条約
アムネスティ・インターナショナル日本支部
個人通報制度って知ってる
アムネスティ・インターナショナル日本支部国際人権法チーム
人権、国家、文明　大沼　保昭
犯罪人引渡法の理論　森下　忠
中学校総合的な学習の時間　高階　玲治
中学校基礎・基本の指導　高野　尚好
社会科重要用語３００の基礎知識　森分　孝治
情報通信技術（ＩＴ）の革新と雇用　厚生労働省
住民基本台帳に基づく全国人口・世帯数表
自治省行政局
「総合的な学習」評価のテクニックとプラン
山本　政男
ロジカル・シンキング　照屋　華子
循環の経済学　室田　武
庇護法の展開　芦田　健太郎
国際人権規約と日本の司法・市民の権利
日本弁護士連合会
船　須藤　利一
狩猟　直良　信夫
からくり　立川　昭二
化粧　久下　司
番匠　大河　直躬
比較食文化論　河合　利光
寝たきりにさせないために　榎村　陽太郎
会社訴訟・商事仮処分・商事非訴　門口　正人
デリバティブと金融技術革新　田尾　啓一
経済成長と環境資産　Beltratti, Andrea
生徒指導と心の教育　森谷　寛之
認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導
市川　伸一
ものづくり人づくり　ものづくり人づくり研究会
女性の就労行動と仕事に関する価値観　森永　康子
実践から知る学校カウンセリング　氏原　寛

自然科学（４００）

体内複合汚染　宮田　秀明
３日でわかるからだのしくみ　田野井　正雄
ライフステージと健康　早川　浩
口語養生訓　貝原　益軒
食事と運動　ネスレ科学振興会
パワーアップ・ウォーキング　大魔人ヤス
21世紀の健康マニュアル　中野　優
毎日の食事のカロリーガイドブック　香川　芳子
弱くある自由へ　立岩　真也
ワイル博士の医食同源　Weil, Andrew
足の痛みと変形を治す本　町田　英一
食をとりまく環境　柳田　友道
検証！くらしの中の化学物質汚染　河野　修一郎

食生活論　川端　晶子
小児栄養学　青木　菊麿
アントシアニン　大庭　理一郎
栄養学概論　中田　瀞
男の食事　小川　万紀子
親子いっしょにこどものダイエット　山崎　公恵
子どもの健康・食事Q&A　力石　サダ
常備・加工食品の選び方　菅野　廣一

工学・技術（500）

ドライフラワーを楽しむ　内藤　朗
小林カツ代の新レシピふだんが一番　小林カツ代
暮らしから描く快適間取りのつくり方　吉田　桂二
独立住居から集合住居の設計まで　武者　英二
色彩建築　INAXギャラリー企画委員会
世界の建築まるごと事典　茶谷　正洋
住宅という場所で　原　広司
その家づくり、ちょっと待った！　中野　博
生活価値を創造する21世紀型住宅のすがた
ハウスジャパン・プロジェクト
居心地のよい集合住宅　Vancouver
安心快適な高齢者配慮住宅　古瀬　敏
簡明食辞林　小原　哲二郎
英国木造建築の美　武田　雄二
建築構成の手法　小林　克弘
高齢者のための照明・色彩設計　インテリア産業協会
新・快適空間　インテリア産業協会
図解事典建築のしくみ　建築図解事典編集委員会
地震と建築防災工学　小野　徹郎
世界のソーラー建築実例集　寺崎　恒正
地域施設の計画　日本建築学会
モダンリビング　アシェット婦人画報社
こんな家に住みたい　柢出版
必ず役に立つ狭小住宅　MeMo 男の部屋編集部
法隆寺を支えた木　西岡　常一
必読！環境本100　石　弘之
構造力学　原　道也
環境ホルモンから身を守る食べ方　足立　礼子
生活経営　松岡　明子
食品の官能評価・鑑別演習
日本フードスペシャリスト協会
食品の消費と流通　日本フードスペシャリスト協会
現代生産経営論　平松　茂実

産業（600）

花言葉「花図鑑」　夏梅　陸夫
道の駅ハンドブック470駅
道路保全技術センター
ユニバーサル・スタジオ・ジャパン公式ガイドブック
角川書店
公共の宿1500　ブルーガイド編集部
商業経済・商業法規　実教出版
国土計画を考える　本間　義人
消費者と食料経済　黒柳　俊雄
日本の商業問題　鈴木　安昭
庭づくりの心と実践　今井　直久
ランドスケープデザインと環境保全　大手　信人
森の生態と花修景　高田　研一
緑のプレゼンテーション　宮後　浩
坪庭のすすめ　小埜　雅章
現代日本の商業構造　岡田　千尋
フードシステムの経済分析　時子山　ひろみ

芸術（700）

山小屋利用でのんびり山歩き　中田　真二
やさしくレッスン花のアレンジメント　落合　恵美
生涯スポーツと健康　佐藤　昭男
教養としてのスポーツ・身体運動
東京大学身体運動科学研究室
年輪年代法と文化財　光谷　拓実
日本・中国の文様事典　早坂　優子
40歳からの運動のすすめ　宮下　充正
「からだ」を生きる　久保　健
登山の誕生　小泉　武栄
高齢者の運動ハンドブック
National Institute on Aging
スポーツ事故と安全対策　野間口　英敏
ウォーキングをはじめよう　白鳥　金丸
「体脂肪」を落として「筋肉質」になる
工藤　一彦
信州の美術館めぐり　窪島　誠一郎
ルーブル美術館の楽しみ方　赤瀬川　原平
自然と触れ合う野外遊び（アウトドア）
日本ネイチャークラブ
フィレンツェ美術散歩　宮下　孝晴
広報・POP・イラスト百科　渡辺　明子

大学生の健康・スポーツ科学
大学生の健康・スポーツ科学研究会
らくらくカンタン一週間で弾ける！ピアノ
シンコー・ミュージック編集部

語学（８００）

よくある「ことば」の質問　国立国語研究所
「ことば」を調べる考える　国立国語研究所
ドイツ語とドイツ人について　江沢　建之助
ドイツ語の諸相　Kluge, Friedrich
ゴート語入門　高橋　輝和
グランドコンサイス英和辞典　三省堂編修所
ジーニアス英和大辞典　南出　康世
日本語の伝統と現代
「日本語の伝統と現代」刊行会

文学（９００）

睡蓮の長いまどろみ上・下　宮本　輝
体は全部知っている　吉本　ばなな
裏稼業上・下　Grisham, John
ポップ１２８０　Thompson, Jim
ペイ・フォワード　Hyde, Catherine Ryan
ＨＥＲＯ　福田　靖
半眼訥訥　高村　薫
永遠の仔上・下　天童　荒太
ロケット・ボーイ　宮藤　官九郎
ココ・シャネルの向日葵　夏季　真矢
贋作工房　夏季　真矢
ひまわりの森　Hayden, Torey L.
ハリー・ポッターと秘密の部屋　Rowling, J. K.
ハリー・ポッターとアズカバンの囚人
Rowling, J. K.
早わかり日本文学　長尾　剛
井上ひさし伝　桐原　良光
この世界のぜんぶ　池沢　夏樹
荒川洋治全詩集　荒川　洋治
釣り上げては　Binard, Arthur
フランス小説の扉　野崎　歓
おーいぽぽんた（本編）　茨木　のり子
おーいぽぽんた（俳句・短歌鑑賞）　大岡　信
太宰治坂口安吾の世界　斎藤　慎爾
万葉集の発明　品田　悦一
初版グリム童話集１～４　Grimm, Wilhelm
蜃気楼都市（ミラージュシティ）　田中　芳樹
銀月王伝奇　田中　芳樹
The mask club　村上　龍
風と遊び風に学ぶ　辰濃　和男
歩けば、風の色　辰濃　和男
寺山修司・斎藤慎爾の世界　久世　光彦
明治文学の世界　斎藤　慎爾